

蛍子と毛羽立つもの



KEBADATSUMONO

mikatuki98

蛭子（けいこ）は蟹が好きだった。勿論、ペットとして水槽で飼うような好きの部類ではなく、食して美味しい～だから好きの好き。しかし蟹は高価なので蛭子の家ではお正月くらいしか食卓には上らない。

蛭子の兄の蛭太はシャコが好きだった。蛭太の好きなシャコの煮つけがよく食卓に並んだ。シャコは裏に返すと海老のように多足の脚が並んでいて、少し毛羽立っている。その少しグロテスクな雰囲気は蛭子はあまり好きではなかったが、蛇腹の甲羅を外して身を食べると結構美味しいと感じていた。

蛭子の母の蛭（ほたる）は大の果物好きだった。特に柑橘系が好きだったが、キウイフルーツが巷に沢山出回るようになると、りんごを買うようなノリでキウイフルーツを買って来た。初め蛭子は少し毛羽立ってザラザラした外皮の手触りと、色が好きになれなかったが、よく熟れているキウイフルーツを丸ごと食べ慣れると結構美味しいと感じていた。更に蛭子はプツプツとしたタネの舌触りが多少気になるが、母の蛭はそれについての不満を口にすることは無い。

ある日蛭子は、母の蛭と共に某ホテルのバイキングコースを食べに行った。そこで蛭子が直ぐに目に着いたのは大好きな蟹だった。しかも珍しく毛蟹がたくさん更に盛られている。蛭子は迷うことなく取り皿に毛蟹を乗せた。

彼女は蟹を食べ終わるとサラダとキノコスープ、そしてチキンソテーを取って席に着いた。その後何度かカウンターとテーブルを往復しては色々と食べ、とりあえず満足していた。

ところがさっきから左手の甲や手首の裏辺りが妙に痒いことに蛭子が気が付いた。ふと無意識に掻いていたらしい左手に目をやると、何と今まで無かったものがそこにはプチプチと発生していた。そのプチプチしたものは透明だが、明らかに皮膚が隆起して出来たものと見える。

「ああ、痒い。痒い。かいかい。かー！」

痒みに耐えられなくなった蛭子がおもいきり左手を掻き始めた。すると少しだったプチプチの数と範囲が徐々に増えて来た。

「いやーん、何これ？ もしかして蕁麻疹？ って、何食べたっけ？」

そう言いながら皿の上の残骸を検証していたが、普段めったに食べない物と言えば毛蟹だろう。蛭子は直感的にプチプチが出たのは毛蟹のせいだと判断した。それは蛭子にとっては大きなショックだった。なにせ大好きな毛蟹を食べて蕁麻疹が出るというのだ。毛蟹じゃなくても、もう蟹類は一切食べられないかもしれない、と思うと楽しみを一つ取り上げられるような気分なのだ。

『でも、今だけ出たのかもしれない……よね？』

蛭子は希望の灯火だけは消したくなかった。

毛蟹事件から数ヶ月後。蛭子は母の蛭が、安かったからと言って沢山買って来たキウイフルーツを一口食べた。ところが一口分のキウイフルーツが喉を通過する時、蛭子に異変が起こった。

「うっ！ か・か・痒い。ああ、痒い。痒い。かいかい。かー！」

何処かで聞いたような言葉を発すると彼女は喉をしきりに掻きだした。そして喉を掻いてい

ると、飲み込んだキウイフルーツが胃に到着したのか、今度は胃の辺りが痒くなりだした。

「あああああ～～～ 痒い！！！」

それ以来、蛍子はキウイフルーツを一口も食べられなくなった。

キウイフルーツ事件から数週間後。蛍子は再び毛蟹を食べる機会を得た。いつもはお歳暮にタラバ蟹をもらうのに、今年は何故か毛蟹が送られて来た。もちろん蛍子は素直に喜んだ。

「あのバイキングの毛蟹はきっと料理をしてフロアに放置されてたから、食中毒こそならなかったが、もしかしたら痛みかかっていたのかもしれない。その点、この毛蟹なら新鮮だからプチプチは出ない筈」

蛍子は楽観的な思考に自分を導いた。そしてその日の夜、早速夕飯の食卓に並んだ毛蟹を蛍子は嬉しそうに食べた。何とも無い。

「うん、美味しいね。やっぱり北海道直送は味が違うわ！」

しかし数時間後、蛍子の手の甲には例のプチプチが現われ、今度は指にまで広がって来た。

「痒！ もう、痒いじゃないのよお～ かいかいかい かいかいかい」

その日の夜、蛍子は眠りに就くまで手を掻き続けていた。

二度目の毛蟹事件から数日後。蛍子の母の蛍がシャコを買って来た。蛍子の兄の蛍太が出張から帰って来るというので、親心なのだろう、兄の蛍太が好きなシャコが食卓にいつもより大量に並んだ。

しかし蛍子はちょっと嫌な予感がした。今までのカイカイ事件からすると、どうも毛羽立つものに反応している気がしていた。毛蟹の毛。キウイフルーツの毛。そしてシャコの裏にも毛羽立つものが存在している。

「まさか……」

そう呟きながら蛍子はシャコを口にした。と、途端に反応があった。

「うっ！ ダメだ！」

三度目の正直とでも言うのだろうか？ すっかり条件反射が身についた＜毛羽立つもの＞への迅速なる反応が蛍子の食料の品数を確実に減らした瞬間だった。

蛍子はもう、大好きな毛蟹もキウイフルーツもシャコも食べれない。あの日あの時、ホテルのバイキングで毛蟹に出会わなかったら、彼女の人生も少しは変わっていただろうに。いや、変わっていただろうか？それは吾々には分からないが、少なくとも蛍子は食の楽しみを3つも減らしてしまったことだけは確かだろう。 了